

# オオサンショウウオの研究 IX

## 用語について(1)

栃本武良\*

### はじめに

兵庫県朝来郡生野町に源を発する市川水系において、オオサンショウウオの調査を始めてから20年が過ぎた。山のようなデータが半ば腐れかかっている。頭の中まで腐らぬ内にと整理にかかったが、オオサンショウウオに関する多くの論文を読み、自分なりに書き進めているうちに言葉の表現に困ることが多々出現した。諸先輩が、それぞれの表現を用いていることもあるが、自分自身でも、その時その時に思い浮かんだままの表現をしていることに気づいたのである。厳密な言葉の定義にまで踏み込むのは得手とするとところではないが、自分なりの整理をつけることと、皆様からのご批判、批評を頂くことで修正を加えつつ、最終的にまとまりがつけば良しと考えて思いつくままに記することを試みたい。

### 1 和名 オオサンショウウオ

今更なにかを言うのかと言われそうだが、現在日本の標準的な動物図鑑である、新日本動物図鑑(北隆館)の前身である日本動物図鑑(昭和2年刊)、同(昭和22年改訂増補版)や岩波書店の動物学辞典(昭和10年刊)では「はんざき」の名前で記載されている(図1)。

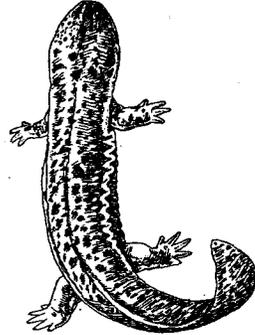
辞書の横綱といわれている、広辞苑の第一版(昭和30年)では「さんしょうお」と、第二版(昭和44年)では「さんしょうお」の項にサンショウウオ科とオオサンショウウオ科の総称という説明だけで、オオサンショウウオに関する解説はない。「はんざき」の項にオオサンショウウオの別称とあるのみである。第三版(昭和58年)でやっと「おおさんしょうお」となっている。

生駒義博編「日本ハンザキ集覧」に収録された古今の文献を見ると、明治時代には「ハンザキ」が主流で、昭和時代に入ると「オオサンショウウオ」が増えている。

大野正男「日本産主要動物の種別文献目録(23)オオサンショウウオ(1)」に収録された570文献中のタイトルに「ハンザキ」と出ているものは61編(1903~1989年)で「オオサンショウウオ」は266編(1900年以降)である。ただし1900年の文献では「大サンセウウヲ」となっており、単に大きなサンショウウオの意味で使われたものと

\* 姫路市立水族館

圖三七四第



Megalobatrachus japonicus (Temminck).

體ハ著シク大ニシテ(八七〇)耗ニ達ス、現存セル有尾兩棲類中、最大ナリ。背腹ニ扁平、且幅廣ク、吻端ハ四シ。背面ハ暗黒褐色、黒色斑紋アリ。外鼻孔ハ吻端ニ位シ小、眼ハ極小、喉嚨ナシ。口ハ極大ニシテ、細齒上下兩類ニ存在ス。體背面ニハ、有孔ノ疣數多アリテ、兩個珠ニハ厚キ鱗アリ。兩肢短ホ、ニシテ指趾短ク、扁平、尾ハ短ク鰭状ヲ呈シ、木桶圓シ。鰓蓋ハ全ク閉鎖ス。本州中部以南ニ多ク産シ、南支那ニモ見出サル。

はんざき  
はんざき(鮎魚科)

図1 日本動物図鑑(1927) 北隆館より

も考えられる。昭和27年に特別天然記念物に指定される以前には「ハンザキ」は61編中55.7%、「オオサンショウウオ」は266編中8.3%しか使われていない。このことは文化財保護法の影響が大きいものと考えられる。

また、英語の“giant salamander”から「大きなさんしょうお」という和訳がなされることも原因の一つではないかと考えられる。私自身、標準和名は簡単明瞭がよいと言う考えなので、「ハンザキ」を使いたい気持ち強いが大勢に流されてしまっている。生駒も同様に「ハンザキ」という名が大好きなので日本名としたいと述べている。せめて、中国産はシナハンザキ、米国産はアメリカハンザキと呼びたいと思うがシナは差別用語

とされているため、チュウゴクハンザキとしなくてはならないようだ。

最近になって、日本特産の生物にはニホンとかニッポンという言葉の頭に付けることを提唱する人がいてニホンシガメとインガメは別種だと子供たちに思い込ませている例がある。しかし、彼らがニホンオオサンショウウオと言っていないのは理解しがたいところである。私はハンザキの4文字が簡明であり、オオサンショウウオの9字にニホン又はニッポンを付けて12文字や13文字にする気持ちは全くない。広く定着した名前を徒に変えることは混乱の元である。それにしても誰がオオサンショウウオと呼び始めたのであろうか？

## 2 隠れ家と産卵場所

岡山県真庭郡では「居屋（いや）」という言葉が使われるそうである。佐藤（1943）によれば「産卵場所」を示すそうであるが、生駒（1963）は「平常の住処」としている。さらに川口ほか（1976）では「産卵場所以外の住む穴」を「居屋」と呼び変えることを提案している。その他に巢孔、巢穴、産卵巢、繁殖巢穴、繁殖巢、産卵



写真1 平坦な川中の小岩の隠れ家

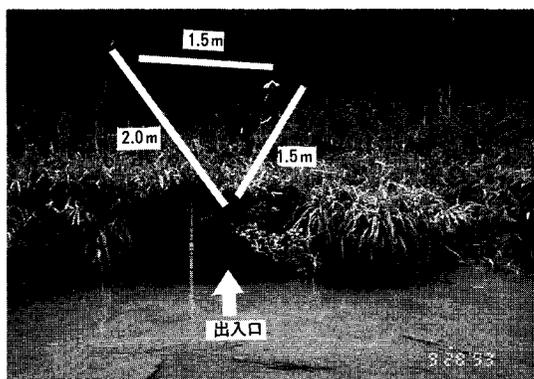


写真2 隠れ家兼産卵場所の横穴（穴の口は30cm位だが、奥は白線で囲まれた広大な広間となっている）

孔などの記載がなされている。

繁殖のための場所は土窟や岩窟もあれば岩棚の場合もあり、ひっくるめて分かりやすい「産卵場所」で統一したいと思う。また、昼間の休息の場は、これまた土窟や岩窟もあれば岩棚の場合もあり、体が隠ればよいというだけの岩（写真1）のこともあるので、簡便な「隠れ家」と表現したい。無論「隠れ家」＝「産卵場所」のこともある（写真2）。

## 3 産卵場所の探索行動

繁殖期に動物が安全な繁殖の場を探すことは当然のことである。オオサンショウウオについては、川の上流に向かって「産卵期移動」が行われるものとされている。しかし、私の調査水域では必ずしも起こる現象ではなく、平常の調査範囲内で幾つかの産卵場所を発見している。また、上田（1988）によれば、逆に川を下ってきた個体もいたそうである。つまり、良い産卵場所がそこにあれば探して歩き回る必要性がなく、そうでない場合には上流や下流に移動しながら探さねばならないという、当然の現象であると考えられる。

ストーリーとしては面白いが、何が何でも遡上するといった誤解は改めねばならない。「産卵場所の探索行動」ということにしたい。

## 4 繁殖行動

「産卵行動」や「交尾騒動」などの表現もみられるが産卵はメスが行い、体外受精である本種は交尾を行わない。排卵（写真3）、放精という表現もよく使われるが捨ててしまうようなニュアンスがあり、「産卵受精」と言ったほうが誤解がない。繁殖期になるとオスの「総排出腔開口部」周囲が明瞭に隆起してくる。総排出腔は総排泄腔、総排泄口、肛門、総肛門などの表現が使われて

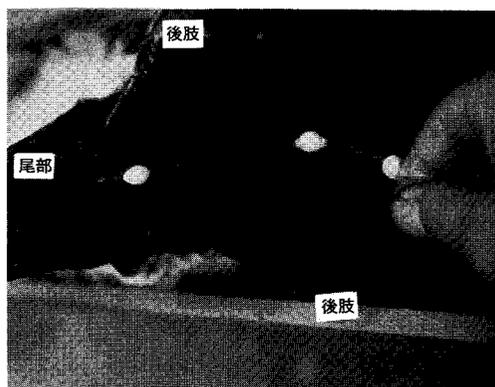


写真3 測定時に力んで排卵したメス（卵はまだ吸水していない）

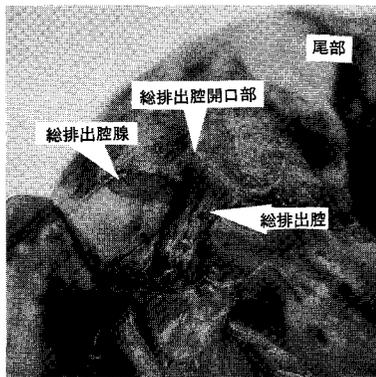


写真4 総排出腔の断面（繁殖期のオスで開口部周囲が隆起している）

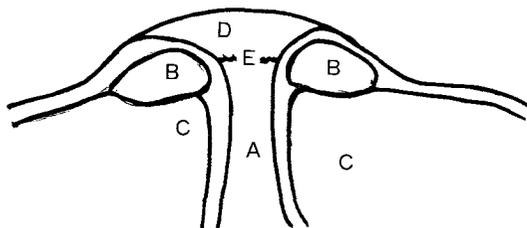


図2 繁殖期におけるオスのオオサンショウウオ総排出腔の断面図

A：総排出腔 B：総排出腔腺 C：筋肉  
D：隆起 E：開口部

いるが「総排出腔」に統一したい。総排出腔開口部周囲の「隆起」についても「腫張」と書かれたものがあるが、肛門腺の発達による「隆起」と表記したい。従来は私自身も含めて多くの人が「総排出腔周囲」が隆起するという表現をしていた。断面（図2・写真4）を見れば分かるように誤りではないものの、少々くどくなるがより明確な「開口部」という言葉を付けることにしたい。

## 5 卵

オオサンショウウオの卵は、直径20mm程のゼラチン様の卵嚢に保護された直径5～8mmの卵黄からなる。この卵がゼラチン様の紐（連絡紐、卵紐、卵索）で数珠つなぎになっているが「卵紐」（らんちゅう）としたい（写真5）。また、産卵の始めと終わりには卵黄の入っていないゼラチン様の球体が数十個見られるが、「空胞」と表現したい（写真6）。

孵化した後の孔が開いた殻は「孵化殻」と呼び、大水や成体の動きにより、産卵場所から出てきてしまった卵または卵塊を「流出卵」としたい。

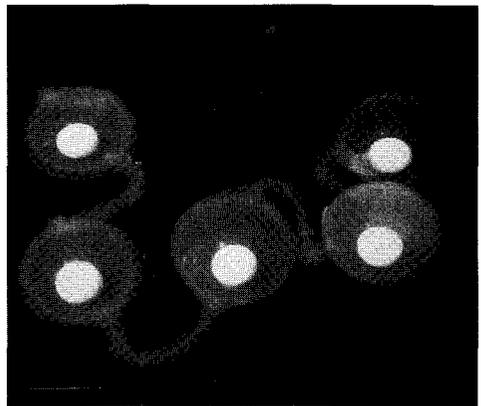


写真5 数珠つなぎになっている卵

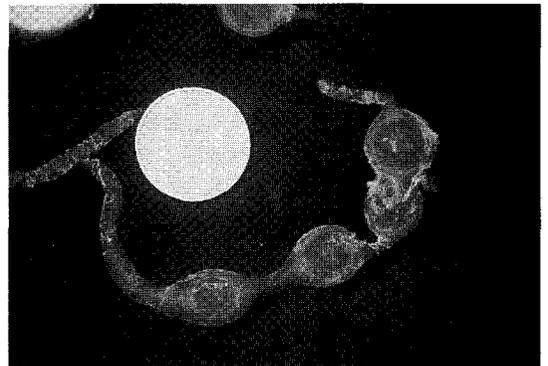


写真6 卵黄の入っていない空胞と百円硬貨

## 6 卵を守るオス親

主、守卵雄、占有雄、デンマスターなどの呼び方がなされているが「主」（ぬし）としたい。「主」は産卵場所の整備を行い、訪れたメスが産卵し受精させた後は卵を守り、幼生が川のなかに広く散る（「分散」）頃までそこにとどまる。この間に、「つり出し」（針金の先に餌を付けて食いつかせ、穴から引き出す）を行っても、「威嚇行動」のための噛みつきだけで、すぐに放してしまう。産卵期以外なら、一度食いついた餌は絶対に離さないため、昼間の個体調査に「つり出し」は有効である。

「主」は穴から出て活動することがあり、卵や幼生を守る意識があるのかどうかよく分からない感じがするが、この「威嚇行動」を考えると「保護行動」と言えるものであろう。

穴の出入り口にはイモリやイシガメがうろうろしていることがあるが、特に追い払う行動がなくとも巨体の「主」が入りすれば外敵も逃げ散るであろう。平成6年3月の昼間の調査では、穴の口の周辺で50匹の0才幼生（前年の秋に孵化）を確認したが、昼間には姿の見えなかったイモリが夜になると十数匹も集まってきていた

のが印象的であった。「主」による「保護行動」はどの程度意識的なものかは不明だが、穴の中での動きは自然に卵を揺り動かし、酸素をまんべんなく各卵に与える効果があるだろう。全身で卵塊を巻いていかにも守っているかのようなイラストが書かれていたり、背中に載せて守っていたなどの目撃談もあるが、単に卵塊の下にもぐり込んでいるだけのようだ。

穴から出るときに卵塊の一部が外に出してしまってもそのまま、戻すことをしないのは本当に卵を守る意識があるとは考えにくい。

### 参考文献

- 1 生駒義博(1963) : ハンザキ(一名オオサンショウウオ)の研究, 津山科学教育博物館研究報告No.1, 10 pp.
- 2 生駒義博編(1963) : 日本ハンザキ集覧, 478pp. 津山科学教育博物館.
- 3 川口四郎他(1976) : 特別天然記念物緊急調査(オオサンショウウオ生息地)報告書(1), 74pp. 岡山県
- 4 河村智次郎(1965) : おおさんしょうお(はんざき) 530. 新日本動物図鑑(下), 北隆館.
- 5 新村 出編(1964) : さんしょうお, 888. 広辞苑第1版, 第12刷. 岩波書店.
- 6 新村 出編(1973) : さんしょうお, 922. 広辞苑第2版, 第7刷. 岩波書店.
- 7 新村 出編(1984) : おおさんしょうお, 301. 広辞苑第3版, 第2刷. 岩波書店.
- 8 岡田弥一郎(1927) : はんざき, 250. 日本動物図鑑. 北隆館.
- 9 岡田弥一郎(1947) : はんざき, 290. 改定増補・日本動物図鑑第5版. 北隆館.
- 10 大野正男(1991) : 日本産主要動物の種別文献目録(23)オオサンショウウオ(1). 東洋大学紀要 教養課程篇(自然科学) No.35, 61~135.
- 11 佐藤井岐雄(1943) : オホサンセウウラ(ハンザキ), 320~346. 日本産有尾類総説. 日本出版社.
- 12 上田弘隆(1988) : オオサンショウウオの繁殖生態, 48pp. 大阪市立大(理)生物学科 動物社会学研究室卒業論文.
- 13 谷津直秀・岡田弥一郎編(1935) : ハンザキ, 242. 動物学辞典, 岩波書店.